

## 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	レアメタル等資源ニューフロンティアリーダー養成プログラム	申請大学名	秋田大学
申請大学長名	吉村 昇		
プログラム責任者	小川 信明		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画は着実かつ誠実に実施されており、全体としては概ね良好と判断される。</li> <li>・国際経済、国際政治系の科目を新たに新設し、平成26年度新設の国際資源学部に、国際法と鉱業法の教員を配置し、その教員が当該科目の講義を担当する予定である旨が示されており、着実に遂行されることを強く期待する。</li> <li>・学生数が少なく、とりわけ、日本人学生が少ない。</li> <li>・英語教育については先走りしすぎている観がある。</li> </ul> <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体として、当初の目的通り進んでいる。</li> <li>・国際貢献という観点からはリアリティに富んだ教育を行っており、評価できる。</li> <li>・学生の満足度が高く、プログラム担当教員・事務職員の熱意も感じられる。</li> <li>・国内から優秀な日本人学生をいかにして集めるか、戦略を練り直す必要がある。この観点からは、奨励金や教育研究支援設備を整え、プログラムに関する学内広報を積極的に行うと共に、今後は他大学への広報活動や、社会人学生の獲得に向けた準備を進めることを期待する。学部学生に対しては、プログラムの良さを学内に浸透させていくことが求められており、学外からの受入については、例えば、社会人学生を受け入れに当たっては企業等にとって魅力あるプログラムにしていくことが有効である。</li> <li>・講義がすべて英語で行われるということが、学生にとって、大学院への進学を躊躇する要因になっている可能性がある。毎年開講の講義であれば、隔年ごとに英語と日本語の講義を行う等の工夫をすることも一案である。</li> <li>・学生の立場に立って、より実質的・効果的に学生の力が伸びるように、カリキュラムづくりを工夫する必要がある。</li> <li>・講義をすべて英語で実施するという点については、今すぐ達成しようとするよりも、例えば5年後を目標として、学生の学力を段階的に上げていくことも一案である。</li> <li>・英語の講義について、本プログラムに在籍していない学生も受講できる形で開講してもよいのではないか。そうした弾力的な運用を通して、リーディングプログラムの効果が全学に波及するようになればさらによい。</li> <li>・本プログラム修了後にどういった道に進むのかという可能性を、教員が学生に示していく必要がある。鉱業関係の企業に勤めるだけでなく、商社や官庁、国際機関といった様々な道があるはずであり、より複眼的視点からキャリアパスを考えていただきたい。</li> <li>・留学生のキャリアパスについて、我が国との関係を考えるべきであると考え。特に、将来の有利な資源外交や戦略的互惠関係を見据えて、資源大国であるボツワナ、モンゴルの大学と国際連携協定を結び、学生の受入れを積極的に行っているという回答を得たが、より一層加速させることを強く望む。</li> </ul>			